

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2017年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	文学部文学科・教授	桑瀬章二郎 印
研究課題	フランス啓蒙思想における「性」と「異常者」ールソーを中心に	
研究期間	2017年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 966,803円 / (採択金額) 1,000,000円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究はフランス啓蒙期を対象に、その時代に特有な「性」をめぐる文学的表象と哲学的議論を、「異常者」の形象に注目しつつ検討していくものである。十八世紀を、「性」をめぐる「言説の爆発」(フーコー)が起こった時代と位置付けることには、早くから十八世紀研究者によって疑義が提出されてきた。本研究は、フーコー同様、この時代の「性」、そして「異常者」に注目するが、いわゆる言語表現の総体としての言説にあらわれる「性」ではなく、当時の代表的作家・思想家の著作に描かれる「性」を分析の対象とする。極論すれば、本研究は、精緻な作家論、作品論を通じて、「性」をめぐる啓蒙思想の一断面を再構成することを目指す。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[啓蒙思想] [セクシュアリティ] [フランス十八世紀]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究ではフランス啓蒙期を対象に、その時代に特有な「性」をめぐる文学的表象と哲学的議論を、とりわけ「異常者」の形象に注目しつつ検討することを目指した。ここで「異常者」とは、この時期に様々な知の領域で特別な意味を付与された「宦官」や「カストラート」といった「去勢者」のことである。

本研究はいわゆる短期的な達成を目指すものではなく、長期的な成果、すなわち研究書という「書物」を最終到達点として構想・遂行された。そのため必然的に文献の精読・精査がその主たる成果となる。期間内に進めることのできたこの文献調査の内容について、研究の深化にともなう構想の変化に触れつつ、可能な限り具体的に説明することにしたい。

1) 本研究がヴォルテール、モンテスキュー、デイドロ、ピュフォン、サド、そしてルソーといった、いわゆるフランス啓蒙の代表的思想家とその作品を対象とする点に変わりはない(シャルダンにも例外的な場所が与えられる)。だが、それらを読み直す作業を進めるうちに、やはり啓蒙の「周縁」やそれに先立つ時代に位置する思想家の著作をより丁寧に精査することの重要性を理解するに至った。たとえば『去勢者論』を書いたアンシオン(1659-1715)や、バール(1647-1706)、ティソ(1728-1797)といった歴史家、思想家、医学者の一部の著作がその典型である。交付期間内には、こうした「鍵」となる著作をできる限り読み直し、関心の対象を広げ、問題の所在をより明確にすることができた。

2) さらに、「去勢者」に関する重要な議論を展開した先述の思想家や作家と同時に、それについて直接的に触れることのなかった作家や芸術家についても検討する必要性を認識するに至った。たとえば、いわゆるイタリア・オペラ擁護者の格好の攻撃対象となったジャン＝フィリップ・ラモー(1683-1764)がその典型である。この十八世紀フランス音楽の巨星が「カストラート」や「宦官」についてどのように考えていたのかを正確に把握するのは困難であるが、その複雑な音楽理論に、あるいは(「後宮」「ペルシアもの」、オリエント表象があらわれる)『優雅なインドの国々』といったオペラ作品に、「去勢者」についての彼の思考の痕跡を見出すことはできないか。こうした点を念頭に置いて、ラモー作品を再検討した。またヴォルテール、ルソーとの合作(と言わないまでも)「共同作業」についても検討し、国際シンポジウムで研究報告を行った。ラモーについて近年の最も重要な研究書の書評も自身の研究サイトに公表した。

3) 研究の深化にともない、さらに理解を深める必要性を最も強く感じたのが、本研究の具体的な対象範囲の「外部」に広がる壮大な歴史学的、人類学的、ジェンダー論的諸問題であった。繰り返しになるが、本研究が「性」をめぐる啓蒙思想の一断面の再構成を目指すことに変わりはない。だが、この研究を学術的に真に高度で有益なものとするには、より長期的かつ巨視的な視座の導入が不可欠であると確信した。そのため、アメリカのコロンビア大学図書館で集中的な研究調査を行った。以下に示すような知識を得るために最も効率的と判断したためである(実際、次に示す A~C の「去勢者研究」関連文献が極めて充実していた)。このようにして得られた知識と情報は、本研究の成果の最も重要な構成要素であるので、これに関しては詳しくその内容について説明することにしたい。

A) 広義の歴史研究では、1990年代より「去勢者研究」とでも呼べる領域が急速に注目されるようになった。古代ギリシア、ローマにおける「去勢者」についての研究、初期キリスト教と「去勢者」の関係についての研究など挙げればきりがなが、とりわけ、キャスリン・リングローズ、ジョン・タファーらの研究が次々と刊行されていった、ビザンティン時代の「去勢者研究」は特筆に値するだろう。こうした先行研究について調査を進めることができた。これらは、統治や処罰のための去勢、戦争による去勢(象徴的戦利品としてのペニス)、交易のための去勢(商品としての去勢者)、宗教的要請、性的目的、医学的理由にもとづく去勢等、歴史的事象としての多様な去勢の形態を明らかにしつつその実態に迫っており、啓蒙の「去勢者」を理解するうえで様々なヒントを与えてくれた。

研究成果の概要 (つづき)

B) 広義の人類学領域でも、1980年代より「去勢者研究」と類縁性を持つ研究が飛躍的に進んだ。これらは、支配的な歴史的社会的伝統秩序たる男／女の性分類、あるいは本質主義／社会構築主義のパラダイムからこぼれおちるような存在への関心の高まりを反映している。ここでは具体的には、サンビア族、アメリカ先住民社会のバーダッシュ、インドのヒジュラーといった世界に無数に存在する、あるいは存在しえた社会集団についての研究を念頭に置いている(ギルバート・ハートが編み、大きな反響を呼んだ『第三の性、第三のジェンダー』を想起していただければよい)。こうした研究についても調査を大きく進めることができた。啓蒙の「人間学」を人類学に安易に重ね合わせることは慎重であるべきだろうが、ビュフォン、デイドロ、ヴォルテール、ルソー、サド(たとえば『アリーヌとヴァルクール』)といった啓蒙期の思想家の人類学的思考を分析する際にこうした視座は極めて有益となる。

C) さらに、A)、B)と重複する部分があるが、「去勢者」に関する通史から貴重な情報を得ることができた。「去勢者」についてのいわゆる通史はいくつか存在するが、いずれも(当然ながら)恣意的な分析が展開されるために、大きな注意を持って読む必要がある。ゲイリー・テイラーの『西洋男性の去勢概史』(2000)も古代から現代に至る去勢の諸問題を網羅的に扱い、さらには著者固有の歴史観が展開されるので、到底議論をそのまま受け入れるわけにはいかない。だが、アウグスティヌスとフロイト、そしてとりわけトマス・ミドルトンという三人の特権的対象を選んで展開される詳細なテキスト分析からは重要な示唆を得た。また彼が(フロイト批判として)こだわる男性性器切断と睾丸摘出手術の差異の問題は、たとえばこの差異を徹底して消去しようとしたヴォルテールのような思想家について論じる際、極めて重要な視点になると思われる。

以上のように、啓蒙の「去勢者」の問題を、研究開始時に比して、はるかに大きな歴史的文化的背景の中に位置づけることによって、真に独創的な啓蒙思想研究を導入する準備ができたといえる。また、「去勢者」という(一見奇をてらったかのような)問題の重要性を改めて確信することができた。最終到達点としての「書物」には、こうして得られた知識と情報が組み込まれることになる。

「書物」の準備と並行して、ルソーに関する論稿の執筆も開始することができた。ルソーについては、『新エロイズ』、『告白』、音楽関連著作を扱う予定であるが、まずは『ジュリ、あるいは新エロイズ』についての論稿から始めた。

この作品は、タイトルが示す通り、啓蒙のエロイズ像、アベラール(≡「去勢者」)像について考えるうえで鍵となる著作である。また「カストラート」を含む様々な音楽論、文化論も組み込まれている。さらに重要なのは、いわゆる彼の政治論、宗教論も作品内で大きな位置を占めており、「人口」や「独身」、「結婚」や「禁欲」といった、啓蒙期の代表的主題をめぐって興味深い議論が展開されている点である。主要登場人物のひとり、新たなアベラールたるサン＝プルーは、(モンテスキューの著作に象徴的に見いだされるような啓蒙のオブセッションである)「人口減少」の問題や宗教の問題に結び付けて「独身」が批判されうること、さらには過度な「禁欲」が告発されうることを認識している啓蒙知識人である。だが、彼は同時に、いっさいの欲望を断とうと試み、独身であり続けることを余儀なくされる「反啓蒙」的人物でもある。ルソーは「去勢」を反自然的な行為と断罪しつつ、この作品内では新たな象徴的な「去勢」を導入せざるをえなかったと図式化してみることも可能であろうが、そうした単純な図式で満足することなく、ルソーの特異な「去勢者」観に迫りたいと考えている。

なお、「書物」は日本語で執筆する予定であるが、以上の論稿は完成後、フランスの国際研究誌に発表する予定である。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ④ « « Des trois Auteurs » : Rameau, Voltaire, Rousseau », Littératures et Autorités, colloque international organisé par GRIHL et Groupe de recherches sur les littéraires et l'historiographie, Institut Français Japon-KYUSHU, 2017年9月23日
- ④ 「ラモー 自文化中心主義の誘惑?」、http://pretexte-jean-jacques-rousseau.org/?page=pg03b_171014013801